

---

# 暗がりの夢の中で、戯言を

東雲咲夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暗がりの夢の中で、戯言を

### 【Nコード】

N16070

### 【作者名】

東雲咲夜

### 【あらすじ】

いつも眠る前に夢想をするのが、私の癖。幼いころからずっと続いている。

綺麗、醜い、苦しい、楽しい、悲しい、ありえない。  
どんな夢がお望み？

(前書き)

そねどは、じいね

真昼に降る雨よりも、夜に降る雨のほうが美しく感じられるのは、何故だろう。陰鬱な雨だとしても、窓を叩くその音色は心地よい。仕事の疲れを洗い流した後の身体には、とてもよく響く。

小さな冷蔵庫から、好みの酒を出して、グラスへと注ぐ。ちびちびと舐めながら、窓を叩く雨を眺める。線を引いて流れ落ちる真っ直ぐな雨。その痕が頭の中にも残って、まるでノイズのように感じる。何を考えるでもなく、ぼうつとただ眺める。そのうちに、お酒もほどよく回ってきて、意識がふわふわとしてくる。残っていたお酒を一息に飲み干すと、わたしは濡れ髪もそのままに、ベッドへと倒れるようにして身を沈める。少しサイズの大きいバスローブをうつつしく思った。けだるさに身を任せて、わたしは目を閉じる。瞼を閉じたなら、そこから先は夢の時間。

”どんな夢がお望み？”

小さい頃から、私はベッドに入ると、そう自問自答する癖があった。妄想癖といってもいいのかもしれない。夢だから、夢想かもしれないけれど。色々な世代のわたしが浮かんでは、その問いに答えていく。

幼稚園のころの、無邪気なわたしがいう　きれいなお花畑が見たい　（枯れてしまった花も混じっているのに）

様々な種類の混じった、小さな花畑を夢想してみる。所々枯れ朽ちた花が混じって、模様が生まれる。あせた色も、鮮やかな色も、どれの同じくらいに美しい。小さなわたしの目は、綺麗な花だけを見ているのだろう。感じるはずのない甘い香りと共に、次のわたし

が浮かんでくる。

小学生の頃の、甘えんぼのわたしがいう お父さんとお母さんに会いたい (両親は幼い頃に死んでいるのに)

遠い遠い、繰り返し思い出さないとかすんでしまうような、昔の記憶。珍しく家族三人で遊園地に行ったとき。左手は母と、右手は父と繋ぎながら、馬鹿みたいにはしゃいでいたわたし。仕事が忙しい両親と、一緒にいられることが嬉しかったのだろう。なんのへんてつもない、どこにでもありそうな遊園地の、少しだけ大きい観覧車。一番高いところからみた景色だけは、今も忘れていない。何度でも、何でも甘えんぼなわたしは観覧車に乗り続けるのだろう。観覧車から降りると、次のわたしが目の前に立っていた。

中学生の頃の、現実逃避のわたしがいう 御伽話の国に行きたい (所詮は物語の中だけの世界なのに)

深い森にしげる、不思議な形の植物。荊をたどっていったなら、いったい何があるのだろう。とげに包まれたわたし？ 花がしゃべって歌い、鳥が翼をまげて、うやうやしくお辞儀をする。ああ、木の影で笑うのは、にやりと歯をむき出しにした猫。くるくると回る首を、はねてしまいたい。真っ赤な、綺麗な色が咲くでしょう。ふとみれば、足元には穴が開いている。案内役の白ウサギは、わたしを放って何処かへ行ってしまった。お話が好きなわたしは、ずうつと森の中。思い切って穴に飛び込んだわたしの頭の中に、声だけが響いた。

高校生の頃の、独りよがりなわたしがいう 誰もいない、何も  
ない夢を (存在しないのなら、わたしはどこに?)

そうして、夢の世界は暗闇に包まれた。もともと、夢なんて色も形もないもの。元の、正しい姿に戻っただけなのだ。立っている

のか、あるいているのか、前を見てるのか、後ろをみているのか。感覚がふわふわと漂う中で、わたしはまた問いかける。

さあ、今のわたしはどんな夢がお望み？

わがままの限りをつくして贅沢な暮らしをしている、貴婦人の夢？ 抑圧されたストレスを晴らす、血溜まりに軀ばかりが積み上げられる夢？ 詩人が語るのもためらうような、残酷な夢？ 自らが英雄となつて先陣を駆け抜けてゆく、革命の夢？ 吐き気をもよおしてしまいそうなくらいに、甘いまどろみ？それとも、夢を見ることすら怠惰に思い、何も望まない？

わたしが、望むのは ずっとそこにいたくなるような、陽だまりの夢（永遠なんてありはしないのに）

休日には、ゆっくりと読書を楽しんで、料理をして。親しい友人を呼んで、ふるまってみたり。少し焦げてる、などとはしゃいでみたり。他愛のない話を、とりとめもなく喋って。緩やかに穏やかに流れていく時間。一人じゃなくて、誰かと一緒にいられて。寒い夜も暖かく感じられるような。特別なことはないけれど、どこことなく満ち足りている。そんな夢を、今のわたしは望んでいる。

日常生活は仕事で埋めつくされて、自由な時間など、ほとんどありはしない。息をつけるのは、寝る前……お酒を飲んでいるときくらい。浴びるように飲むのではなく、ほんの少量を時間をかけて。そうしている、酔いもほどよく回り、ぼうつとしてきて、何もかもがどうでもよくなるから。

仕事自体は嫌いではない。上司の人柄もいいし、人間関係にも不満はない。仕事が忙しすぎるのが、つらいけれど。忙しいからだろうか。最近をよく思考がからっぽになる。それでも仕事はこなせて

いるのだから、不思議なものだ。仕事は努力するのだけれど、私的なことにはつい怠惰になってしまう。こうなったらいいな、と他人任せにしてばかり。だからわたしは、夢をみる。

まどろみの夢は夜になり、友人は去っていく。行かないで、わたしはすがりつくけれど、友人の身体は臙に消えてしまう。ああ、夢ですら最後までいられないなんて、中途半端。浮上していく意識の中、わたしは繰り返し思う。夢の中で、朽ち果ててしまえたらいいのに。そうすればずっと、夢のなかにいられるのに。

身体を包む寒さで目が覚めた。乱れたバスローブを直して枕もとの時計を見ると、まだ夜と呼べる時間だった。そんなに時間はたっていないらしい。お風呂あがり、そのままにして寝たのがまずかったらしい。ぞくりとした寒気が、まとわりついて離れない。薬でも飲んで、また夢の中にもぐろうか。一度はそう思ったのだけれど、わたしは再び冷蔵庫から酒を取り出して、そのまま飲みだした。窓の外では、さきほどよりも強くなった雨音が響いているのだろう。ノイズが、ふえていく。寒気のせいか、酒のせいか。くらくらとしてくる頭の中で、わたしは思う。何度夢にもぐろうと、どれだけ夢に憧れても、わたしは夢にとどまることはできないのだと。つかの間の刹那だから、夢。ずうつといてしまったら、そこはきつと現実になってしまう。それを繰り返ししていくのが、生きるということなのかもしれないけれど。

わたしが……死んでしまったら、その時は夢になれるかもしれないけれど。死だけは、刹那で永遠の夢。覚めることは、決していないから。そうなっても、わたしは喜ぶのだろう。やっと夢の中にいられる、と。

頭がだんだんと重くなってきた、わたしは再び横になる。瞼を閉じる瞬間に願うことは、ただ一つ。

” 望みの夢が、見られますように ”

( 願わくば、陽だまりが現実となりますように )

(後書き)

はい、ジャンク品です。なんか無性にかきたくなりまして。御読みくださった方、どうもありがとうございます。

夢はいいですよ。でも現実を生きないですね

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1607o/>

---

暗がりの夢の中で、戯言を

2010年10月11日06時16分発行